

五輪塔（火輪）の製作工程の検討

小野木 学

はじめに

近年における中世石塔の研究成果は著しく、『中世石塔の考古学』や『日本石造物辞典』など、列島規模での論考や資料紹介が掲載された刊行物が出版されている¹⁾。岐阜県では、平成8年に横山住雄氏が県内の中世石塔の銘文を網羅した『岐阜県の石仏石塔』を刊行した。また、近年では、県内の代表的な中世石塔の実測図の提示や、土岐市と瑞浪市における石塔調査報告、海津市における採石場跡の分布調査などがなされている²⁾。筆者も石塔を実見する機会が増えており、平成23年6月に数名の研究者とともに美濃地方の石塔見学会を行った際、不破郡垂井町の岐阜県指定史跡「春王・安王の墓」の南側の無縁墓地にて、石塔未製品の存在に気付いた（写真1）。その後、平成24年3月に、墓地管理者である古山学氏の立ち会いのもと、筆者と竹谷充生氏で調査し、五輪塔の未製品や、宝篋印塔の基礎の二次加工品³⁾などを確認した。



写真1 無縁墓地近景（平成23年6月撮影）

1 春王・安王の墓の概要

春王・安王の墓は岐阜県不破郡垂井町御所野に位置する（図1）。この付近は相川によって形成された河岸段丘上にあり、表層には相川によって運ばれた扇状地堆積物と、主に南宮山塊からもたらされた碎屑物が分布している。南宮山塊の構成は砂岩と頁岩の互層であり、砂岩は粗粒または中粒で、概して砂岩層が頁岩層よりも厚い⁴⁾。

春王・安王の墓の由来は次のとおりである。嘉吉元年（1441）、関東管領足利持氏の子春王（13歳）、安王（11歳）は、結城（ゆうき）城で室町幕府方の上杉氏と戦って敗れ、捕らえられた二人は京都へ送られる途中、足利義教の命により美濃の金蓮寺で斬られた。現在、金蓮寺は垂井町垂井に位置する。本来は垂井町御所野（または春王・安王の墓の南西にある字道場野）にあり、寺伝によれば伝

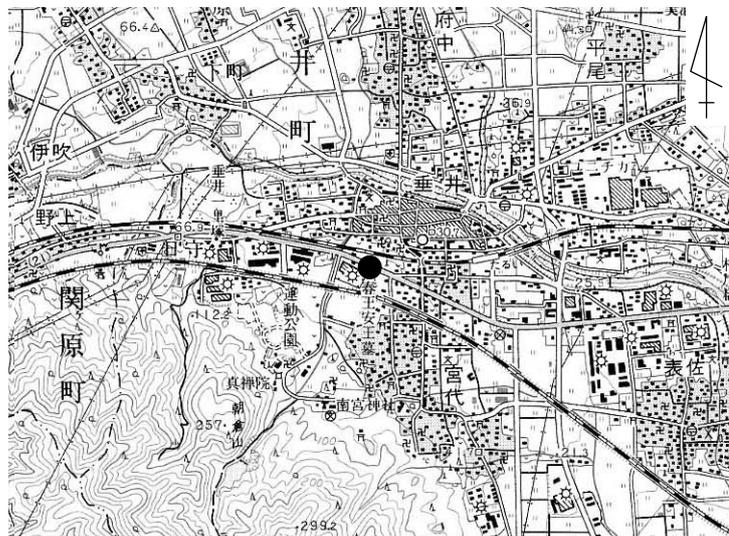


図1 遺跡位置図（国土地理院発行1：50,000地形図「大垣」、「長浜」）

教大師の開基にして美濃国一ノ宮南宮神社第一の別当職であったといわれ、それ故に神護山瑠璃光院御所野道場と称し、境内四町四方に堂塔 33 院があったとされている。初めは天台宗であったが、応永 17 年（1410）に時宗に改めた。春王と安王の遺骸は院西の古松の下に葬られたとされている⁵⁾。

古山学氏によると、無縁墓地内の石塔はその周辺にある現代の墓地造成時などに出土した寄せ集めであり、現在、未製品のほかに砂岩製の五輪塔、一石五輪塔、宝篋印塔、石仏、花崗岩製の五輪塔などの各部材が確認できる。小稿では、これらのうち数量の多い火輪の未製品を中心に図化し、その完成までの製作工程等を検討することを目的とする。

2 石工の作業工程等の研究略史と加工痕の分類

(1) 研究略史

石工の作業工程等の復元の研究として、まず和田晴吾氏の研究が挙げられよう⁶⁾。和田氏は 3 世紀後葉から 7 世紀にかけての石工技術の検討に際し、「石工技術の体系を概観し、作業工程と工具、およびその用法について一定の理解を得るため」に、新潟県佐渡相川の例を整理した。そして、「現状では、古墳時代の製作物について民俗例の作業工程をそのまま採用するのは不相当と判断し、具体的には石棺の製作過程を想定しつつ、石材の切りだしを「山取り」、石棺内部を削りぬき、棺の形がほぼできあがるまでの成形段階を「粗作り」、その後の表面調整の段階を「仕上げ」と呼んで区分した。小稿で扱う製作物（五輪塔）の年代は中世後期から近世初頭頃であり、対象とする時代が異なるものの、和田氏が提示した「山取り」、「粗作り」、「仕上げ」は、石工技術の基本的な作業工程と認識できる。なお、中世石塔の素材となる石材は、和田氏の紹介にある山丁場のように岩盤から石を切出すものの他に、谷に露頭する石塊、あるいは押し流されて土中に埋没した石塊⁷⁾（掘丁場）、河川敷の転石採集⁸⁾などがある。そのため、小稿では和田氏のいう「山取り」を「素材の採集」と置き換え、製品完成までの作業工程を「素材の採集」、「粗作り」、「仕上げ」という用語で呼称する。

さて、各作業工程における製作技法について、和田氏は山取りの技法として「a 掘割技法」、「b 自然石の利用」を挙げ、他に「火砕技法」や「矢穴技法」を紹介している。また、粗作りの技法として「a 線引き」、「b ノミ叩き技法」、「c 溝切技法」、「d チョウナ削り技法」、「e 工具としての自然石」を挙げ、仕上げの技法として「a ノミ小叩き技法」、「b チョウナ削り技法」、「c チョウナ叩き技法」、「d みがき技法」を挙げた。近年では兼康保明氏が花崗岩の加工技術として「①打欠き」、「②ハツリ」、「③小叩き仕上げ」の事例を紹介している⁹⁾。

では、次にこれらの研究史を踏まえて、今回図化した資料の加工痕について分類する。

(2) 図化資料の加工痕の分類

今回図化した資料の石材は、いずれも硬質砂岩（もしくはその可能性が高い石材）である。その表面には剥離痕と敲打痕が観察でき、詳細は次のとおりである¹⁰⁾（図 2）。

①剥離痕：石塊の角をはつった痕跡。剥離の大きさと打点の形状から、以下の 3 つに分けた。

a 剥離が大きく、打点が扁平な剥離痕：幅約 0.5 ～ 1.2 cm の打点を有し、剥離痕の幅は約 8 ～ 16 cm である。

b 剥離が小さく、打点が扁平な剥離痕：幅約 0.5 ～ 1.2 cm の打点を有し、剥離痕の幅は約 3 ～ 8 cm である。剥離痕 a・b は、片刃や平ノミなどの直線的な刃先をもつ工具を、石材の縁辺部に直角